『比較民俗研究』28. 2013／11

書評

# 崔徳源著・李允先編
# 『천년의 사랑(千年の愛)』

金　泰順※

民俗学者である崔徳源（1935～2011）先生の遺稿作を弟子の李允先が編集した単行本である。500ページ余りの本文と100点余りの写真と絵が収録されている部厚い本である。編集者の前書きによると原本には、小説という前提がついているが、編集しながら、小説というよりストーリーテリングに近いと判断し、民俗文化をストーリーテリングとして記述する実験、一つのジャンルを定立する試みをしたものという。

書評をする前に、ストーリーテリングが何なのかについて考えてみよう。ストーリーテリングは、ストーリーとテリングの複合語である。これを主に応用する分野は経営学である。組織のリーダーが組織改革の必要なときや販売部門のマーケティング戦略を練る際に利用している。伝えたい思いやコンセプトを、それを想起させる印象的な体験談やエピソードなどの「物語」を引用することによって、聞き手に強く印象付ける手法である。ストーリーテリングは印象に残るという長所がある。商品を宣伝するとき、抽象的な単語や情報を羅列するよりも、相手の記憶に残りやすく、理解や共感が深いことから引き続き話すことが高い販売効果を得ることになるという。ある商品業界は「ストーリーがブランドをデザインする」というキャッチフレースを掲げ、ストーリーを作ることに全力を尽くす。ストーリーが入った製品はデザインが立派な製品より消費者に高く評価されるということである。 ベトナム戦争で弾丸を止めたというＺＩＰＯライターはいまだに高値で売れている。マッカーサー将軍が使ったというレイバン サングラスの人気は健在である。今日、韓国のファッション界では女性大統領パク・クネに注目してストーリーを作り出す。 パク・クネが着た韓服、パク・クネがつけたアクセサリーなどにストーリーをつけ、マーケティング戦略に利用して高い販売効果を得ているといわれている。

ストーリーテリングはストーリーをテリングする語り手の役割が大事である。語り手によって、次々にストーリーが誕生する。語り手はまず話を覚え、次に語ることになる。話を覚えるといっても、テキストを一字一句間違えずに覚えるという意味ではない。自分の中に話のイメージを作り上げ、そのイメージを言葉にして放つのがストーリーテリングである。自分の中にイメージが、まるで映像のようにできあがっている人、すてきな話をたくさん持っている人は、すぐにそれを語る。しかし頭の中にイメージがあっても語るべき話がないというなら、本の中からいくつかすぐれた話を選んで、語る方式を覚えるしかない。ストーリーテリングはこのように想像力に強く働きかけるので子どもの教育にも利用されている。ストーリーテリングのもう一つの特徴はおもしろくなければならない。聞き手と一緒に楽しみたいとか、この話を聞くとき相手の反応が見たいとかして、聞き手と共有したい話だけを吟味して、採用するようになる。

ところで本書、『千年の愛』は28章で構成されている。場所背景は南韓国、多島海の中の小さな島である黒山島、その島の中のジンチョンという村の話である。朝鮮の実学者・丁若鏞（1792～1836）の話が取り上げられるので年代背景は19世紀と推測される。昔から伝えられてきた民間社会の風俗・習慣などを素材にした民俗小説である。登場する場所背景や行われる儀礼の特徴などは約200年前のものであり、今日の視角では理解しにくいものもある。しかし、編集者が写真や絵を挿入しながら場所、古い言葉、方言などを説明して当時の状況が理解しやすくなっている。つまり、小説をストーリーとして編集者が語り手の役割をしている。編集者自身はこれを民俗学におけるストーリーテリングだという。

小説の表現は赤裸々な性行為の場面、言葉使いの荒っぽさなど通俗的な表現が多い。さしつかえなく表す言葉使いには庶民の日常生活の一部分の様子がみえる。しかし、忘れ去れていた故郷語、方言などを擬声語と擬態語を利用しておもしろく感じさせるのがこの小説の魅力でもある。当時の時代背景からみると儒教世界であるが、性の観念は極めて開放的であり、性＝愛として表現され、当時の陸地、特に都会とは異なった島の性観念がわかるようになる。おそらく儒教思想で抑圧された性意識に対した反撥かもしれない。

島の風景の表現は隠喩法を使用した美しい言葉で表し、読み手にはまるで一幅の水彩画が連想される。荒っぽく喋る島人とは対照をなして多様な作家の文学世界がみえる。さらにところどころに詩や歌を挿入して一層、作品を輝かせる。特に葬式の場面には喪輿の唄を結婚式の場面には新郎と村の男の間に行われる一連の慣行の手順を載せ、実際に読み手はその儀礼に参加したように感じる。作家の文学世界は、それだけではない。作家は伝説を現実へ連れてきて、さらに現実を超現実の世界へ連れて行く。読み手がホラー小説のように感じるかというと、すぐに現実に戻ってくる。まるで昔、子どものとき夜、布団に入って祖母から聞いた昔話のような非現実的な世界が現実と重なっていくのである。

あらすじを簡単にいうと、身分の高いジョンニョという女性は婚姻をする前に、婚約者が急死したために縁起の悪い女だとレッテルを張られ島流しされる。ジョンニョは知恵遅れで片足の不自由な障碍者の青年プンスと結婚をする。縁起の悪い女だと烙印が押されたジョンニョにはさまざまな苦難が待ちうける。品のあるジョンニョと知恵遅れで障碍者のプンスとの似合わない夫婦を村人はあざける。彼女の美貌がとても優れていたからである。さらに非常に肉感的なので島の人々をやきもきさせる。夫のプンスが死んだ原因もその理由からである。村の男たちが彼女をひやかす場面をプンスが防ごうとしたとき、村の男たちは刃物でプンスを刺し、プンスの短い人生は幕を降ろす。夫のプンスが死んでから姑は解産幕で男児マンスを出産する。赤ん坊を産んでから病気になった姑はジョンニョにマンスの養育を頼み解産幕で死ぬ。妻が死んで病気になった舅はジョンニョに面倒をかけないように重い石を自分の体に縛り、筏船を乗って村から遠く離れた海へ身を投げ自殺

をする。ジョンニョは義弟マンスを育てながら様々な苦労をする。マンスが成人になり、結婚させるが、マンス夫婦は夫婦関係が円満ではなかった。ある日、マンスの妻は隣家の男と夜間逃走をする。寂しさに耐えられないマンスは母親のような兄嫁に憐憫の情をもよおすようになる。やがて、マンスは重い力石を持ち上げる村一番の力持ち青年になった。ある日、ジョンニョは成年になった義弟を受け入れて懐妊をする。「兄嫁と一緒になるのは昔からの恩だよ」「可哀そうなナンスを捨ててはいけないよ」、村の人々はジョンニョとマンスの将来を祝福してくれた。一つの季節がすぎた。産み月になってジョンニョは胸痛と腰痛に苦しんでいた。強い南風が吹くある日、「胸痛と腰痛に効く良い薬を調剤してくる」という言葉を残し、ジョンニヨの引き止めを気にもせずに笑顔で手を振りながらマンスは遠い船道にでたが帆船は嵐にあってしまった。ジョンニョは堂山に登り、恨めしくマンスを呼びながら夜を明かす、小説はここまでである。

ストーリーはまだ終わってない。語り手（ストーリーテラー）によって引き続くだろう。語り手はさらに物語（ストーリー）を生成して聞き手に聞かせる（ストーリーテリング）。これがストーリーテリングの基本である。また聞き手は聞いた物語を再生成して自分が語り手（ストーリーテラー）になる。この一連の過程がストーリーテリングであり、この繰り返しが引き続くのでストーリーテリングに結末はないと思われる。つまり、物語（ストーリー）を生成、再生成して語るのが語り手の役割である。

ジョンニョは海女をはじめ、あらゆる島で起こるべき出来事のすべての主人公である。 このストーリー展開を通じて多くの民俗的な素材が使われる。

出産：不正なしで出産するための解産幕、妊産婦の草墳、潮にあわせて出産。

成年儀式：マンスの力石持ち上げ、

結婚式：相見礼（挨拶）のみのジョンニョの結婚式。
派手やかなトルシミとマンスの結婚式。

再婚：米袋に入れて連れて行くボサム。

信仰：島を守る堂、堂神、堂木、堂泉。海女の符籍、豊漁を祈るタルビと女性の陰毛、船霊、堤防を築くため3歳の女児を供養、堂神の怒りをなだめるため人身供養、龍神。

民間医療：糞の味で病気を推測、指先の血、草、牛黄、死者を生かす草墳の人黄。

性：恋煩いを治療するための子宮の陰胞引き（性の抑制）、性の発散（合宮）、梅香（発情）性の紊乱。

葬儀：草墳、喪輿斗 方相氏、喪家で連行されたパムダレグッと七星板、肉脱、二重葬制、水葬。

愛：親の愛、夫婦愛、男女の愛。

この一冊の本の中から冠婚葬祭をはじめ、あらゆる人生がみえる。

『千年の愛』を作家が小説だと明視したが、編集者は編集を加えてストーリーテリングに近いものだと明視した。なぜならば小説というストーリーの上に編集者は小説の内容になる民俗儀礼や場所を写真や絵を挿入しながらより解りやすく語る方法を物語（ス

トーリー）を生成し、試みたのである。物語（ストーリー）は語り手（テラー）によって興味が誘発されるからである。編者はこれを民俗文化のストーリーテリングという一つのジャンルとして実験したというが、『千年の愛』のような膨大なストーリーをどのようにわけてテリングするのかは真剣に検討するべきである。

今日は民俗を伝承する現場が急激に消えてゆく。残っている現場を訪ね、伝説や実話を探りつつストーリーテリングを実現し、若い世代に伝達することは民俗文化を伝承する近道ではないかと考えられる。

まだ実験段階であるが、編者が語ったように民俗文化のストーリーテリングという新しいジャンルが誕生することを望みながらこの本を民俗学あるいは民俗文化を研究する研究者や学生たちに推薦したいと思う。

（島嶼海洋教養文庫②　A５変形判　511頁
2013年1月　民俗苑　）

## ■比較民俗研究会の記録

・第115回（2012年7月6日）
大喜多紀明（アジア民族文化学会会員）
「アイヌにおける『語り』の構造について――修辞分析の視点から」

・第116回（2012年10月5日）
林継富（中国・中央民族大学教授）
「中国少数民族の非物質文化遺産保護研究の六十年」

・第117回（2012年12月3日）
金広植（横浜国立大学非常勤講師）
「1920年代 における日韓比較説話学の可能性―高木敏雄・清水兵三・孫晋泰をめぐって」

・第118回（2013年2月8日）
黄英蘭（中国・中央民族大学）
「現代を生きるアイヌ民族とその文化伝承」

・第119回（2013年2月27日）
清水享（日本大学講師）
「台湾中央研究院所蔵の彝文文書とその来歴について」

・第120回（2013年4月26日）
中村羊一郎（静岡産業大学特任教授）
「東アジアの庶民のお茶―ミャンマーと日本―」

・第121回（2013年10月2日）
李充先（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター客員教授）
「青石・崔徳源の『千年の愛』と韓国の島文化のストーリーテリング」

・第122回（2013年10月18日）
倪彩霞（中国・中山大学非物質文化研究センター助教授）
「南派粤劇芸術の調査と研究」